

長江流域の農耕集落について

徐 光 輝*¹ 林 留 根*²

On the Agricultural Villages in the Basin of the YangZiJiang

Xu Guanghui*¹ and Lin Liugen*²

It is reported that carbonized grains of rice and ancient earthen vessels, which were measured to be 10,000 years old, had been discovered from the cave ruins in Hunan province and Jiangxi province in the basin of the Yanzi. Moreover, the sites of agricultural villages were found from the Pengtoushan ruin and the Bashidang ruin near the shoreline of Dongting Lake. Enormous remains of agricultural and daily instruments had been discovered from the sites as well as carbonized grains of rice, which were measured to be some 7,000 ~ 8,000 years old. These discoveries indicate the facts that 1) the rice crop agriculture had been gradually wide spread in this area since about 6,000 ~ 7,000 years ago, and 2) Japonica type of rice co-existed with Indica type of rice which was supposed to be relatively older type of rice at that time.

As the size of agricultural villages grew bigger sustained by the harvest from rice field about 4,500 years ago, the gap between the rich and the poor became larger and the prototype of large castle city appeared. In this area, Chinese civilization had turned into the earliest stage of the fomentation of the state by this time.

近年、水田稲作と集落生活をはじめとする農耕文化ないし初期国家の形成過程や稲作文化の伝播ルートに関する調査研究は、中国、朝鮮半島、日本列島を含む東アジア諸国の長期的な課題として注目を浴びており、とりわけ考古学界では新しい発見と研究成果が相次いでいる。そこで龍谷大学国際文化学部は2000年2～3月に中国の雲南省と長江上、中流域の現地調査を行ない¹⁾、その後、南京博物院考古研究所と雲南大学人類学科との共同研究を計画し、2002年9月には太湖流域を中心にして、長江下流域における考古学、民俗学調査を実施した²⁾。ここでは、主に考古学の立場から長江流域を上、中、下三流域に分けて、農耕集落遺跡を中心に環壕集落の出現から城郭都市への変遷、水田稲作の源流などについて述べておきたい。

一. 長江中流域

この地域は主に湖北省と湖南省を指すが、北は江漢平原、南は洞庭湖平原が広がり、古くから水産物や米がよく取れる豊かな地域である。長江を中心に河川と湖泊が発達し、夏は洪水の恐れがあるため、新石器時代から地勢の高いところに集落を営むのが一般的であった。

近年の研究によれば、洞庭湖の西北岸にあたる澧水流域の新石器時代文化は彭頭山文化(9,000～7,800年前) → 皂市下層文化(7,800～6,800年前) → 湯家崗文化(6,800～6,300年前) → 大溪

*1 龍谷大学国際文化学部、*2 中国南京博物院考古研究所

文化（6,300～5,200年前）→ 屈家嶺文化（5,200～4,600年前）→ 石家河文化（4,600～3,800年前）へと移り変わったことが分かる³⁾。

一方、江漢平原の新石器時代文化は今から約7,000年前の城背溪文化から大溪文化、屈家嶺文化、石家河文化へと発展し、また大溪文化からそれぞれの地方文化類型を生み出した。洞庭湖平原との関係が非常に密接であることはよく分かるが、彭頭山文化のようなさらに古い段階の新石器時代文化は未だ確認されていない状況である。

洞庭湖平原では遅くとも彭頭山文化のある段階からすでに環壕集落が登場し、水田稲作に関わる炭化米の実物資料も発見され、水田稲作を営む農耕集落の存在が確認された。これまで長江中流域で見つかった環壕集落遺跡と城郭遺跡は少なくとも9ヶ所ある。そのうち、湖南省の八十垱遺跡、城頭山遺跡、鷄叫城遺跡が知れており、いずれも洞庭湖に近い澧県に分布している。あとの6ヶ所、即ち石家河遺跡（天門市）、陰湘城遺跡（江陵市）、馬家垸遺跡（荊門市）、走馬嶺遺跡（石首市）、鷄鳴城遺跡（公安県）、門板湾遺跡（応城市）はすべて湖北省で見つかり、その多くは南部の洞庭湖流域に分布しているが、今後さらなる発見が予想される。

これらの集落遺跡は殆ど屈家嶺文化から石家河文化の中期にかけて使用されたものであるが、八十垱遺跡は彭頭山文化に属する最も古い環壕集落遺跡である。

立地条件からみると、遺跡は一般的に比高約数メートル以内の台地に位置し、その周りは比較的到低く、河川と湖泊が縦横に流れる。

環壕は往々にして人工的に掘削されたものであるが、場合によっては近くの自然流路を環壕の一部として利用したことがわかる。長い歳月の自然作用や人為的な変動によって現存する環壕の幅は10～100メートル、深さは2～4メートルの間にあり、壕内には常に水が溜まっている。石家河遺跡群の中心部から南北長方形に近い、全長約4,800メートルの環壕跡を発見した。環壕の断面は一般的にU字形を呈し、V字形は殆ど見当たらない。城頭山、陰湘城、石家河、馬家垸遺跡の近くでは河川や古河道が見つかり、一部は環壕と繋がっているため、環壕は主に集落内部の用水、排水、水運、灌漑のほか、洪水や外敵の防御にも活用されたと考えられる。

環壕の内側にある土塁は、主に前者の中から掘り出された土を利用して層状に積み上げられたもので、水平になっているものが少ないため、その工法について、版築とは言いがたいことから、堆築と呼ぶ研究者が多い。ところが、城頭山遺跡の場合、集落内部のあるところよりわざわざ土を運んできて自然に流失した土塁を修復したことも確認されている（写真1）。土塁は基本的に環壕と平行し、現存する高さは2～6メートルの間が多いが、保存状態によってさらに高いものもあれば低いものも少なくない。石家河遺跡の場合、地勢の最も低い鄧家湾と三房湾の間に底部の幅50メートル、上部の幅4～5メートル、高さ6メートルに達する大



写真1 城頭山遺跡全景

規模な土壘が残っている。

これらの遺跡では環壕と土壘が兼備された形で検出されたものの、土壘が最初からセット関係で同時に出現したとは限らない。八十垱遺跡では最初に掘削された環壕は集落の東側と南側のみである。その後、環壕を浚う際に掘り出された土で土壘を築いたと報告されている。また、城頭山や陰湘城遺跡の環壕もすでに大溪文化のある段階に掘削されたのである。当初掘り出された土をわざわざと遠く離れたところに運んで



写真2 八十垱遺跡の炭化米

いく必要がないため、環壕の内側か両側に置いていたはずであるが、今日までに残るほどのものではなかったであろう。これは堆築法と呼ばれる土壘の建築工法の有無や初現年代にも直結する問題であるが、日常生活や洪水の前で環壕が主な役割を果たした時期、即ち純粹の意味での環壕集落の時代が相当長かったと推察される。実際、中国東北地方では既に興隆窪文化のある段階から環壕集落が登場し、黄河流域の半坡遺跡や姜寨遺跡からも防御用環壕が確認された。近年、中国の学界では環壕集落という用語を使う研究者が次第に増えているが、環壕集落から城郭都市への移り変わり（特に同遺跡の場合）については、あまり注目されていないようである。

平面形態は大きく二つの型式に分けられる。Ⅰ型式は円形もしくは楕円形に近いもので、八十垱、城頭山、走馬嶺遺跡が挙げられる。Ⅱ型式は丸隅方形もしくは長方形に近いもので、石家河、馬家垱遺跡が挙げられる。Ⅰ型式の規模と年代がⅡ型式より全体的に小さくて古い。八十垱遺跡のような約30,000平方メートルのものに対して、石家河遺跡は城内の面積だけで1,200,000平方メートルに達する、中国先史時代の一大きい城郭遺跡である。平面の形がこのように移り変わる原因はどこにあるのかに興味深いですが、同様な現象は黄河と遼河流域からも認められる。

これらの集落遺跡から規模の異なる住居址、水田跡、窯跡、祭祀跡、墓地と共に、大量の土器、石器のほか、玉器や木器も出土した。彭頭山、八十垱、城頭山の諸遺跡からは大量の炭化米や植物の種が出土した（写真2）。城頭山遺跡では水田跡も確認され、水田稲作を中心とする農耕集落の風景が窺われる。

石家河遺跡群は約30ヶ所の遺跡からなる複合的遺跡が、これらの遺跡は殆ど屈家嶺文化から石家河文化の中期にかけて形成されたもので、地域文化の最盛期の存在が窺われる。実際、屈家嶺文化の分布範囲は長江中流域を遙かに越えて河南省の南部を含む周辺地域に大きな影響を及ぼしたが、後の龍山時代になると逆に中原龍山文化の強い影響を受けるようになり、石家河文化の後期から伝統文化が急速に衰退していくが、その原因については未だよく分かっていない。

石家河遺跡群の諸遺跡はそれぞれ異なる機能を果たしたようである。中西部に当たる鄧家湾遺跡では、土坑墓60基、甕棺墓12基、複数の灰坑（H）と横に長く繋いだ筒型土器や陶缸を検出した。灰坑から千点以上の土偶（人、象、犬、羊、鶏）が出土した。人形の姿は様々であるが、両足の上に置いてある琴を弾くような坐像が目立つ。中南部の三房湾東台の上では、数万点ないし十数万点にのぼると言われる紅陶杯を発見した。作りが粗末で器形も小さいが、おそらく長期間にわたって行われた集団規模の祭祀に用いられたものであろう。このような紅陶杯は石家河遺跡群以外のところにも分布しており、集落間の流通や主従関係を研究する上で非常に重要な資料である。一方、城外の南部に位置する肖家屋脊遺跡からは平面長方形の地上式住居跡、窯跡、灰坑、土坑墓、甕棺墓



写真3 河姆渡遺跡の高床式住居の復元



写真4 河姆渡遺跡の土器に刻まれている豚

と共に大量の土器、石器などが出土した。特に石鉞、石鏃、玉器のほか、H357から出た陶罐の表に刻まれている羽冠執鉞人物立像や一部の土器に見られる独特の符号は、この遺跡の重要性を示している⁴⁾。よって中国の学界では石家河遺跡群を巨大な拠点集落ないし初期段階の城郭都市と見ている。

石家河文化期以後の大型集落の状況についてはよく分からないが、殷商中期即ち二里岡上層文化期に相当する盤龍城遺跡と石家河遺跡群の東北部に位置する西周時期の土城遺跡が知られている。

盤龍城遺跡は、東西約260メートル、南北290メートル、総面積は75,000平方メートルを超える。幅約14メートル、深さ約4メートルの堀（護城河）の内側に高さ1-3メートルの城壁が残っており、その四辺の中段にはそれぞれ一つの門址が残っているが、その外側には吊橋があったと推定される。城内では大型宮殿址が見つかり、城外の大型墓からは大量の青銅器が出土した。青銅器の特徴や城壁の版築技術から見れば、この遺跡は殷商王朝が長江中流域に設置した方国である可能性が大きい。

二. 長江下流域

ここでは、主に太湖を中心とする江蘇省と浙江省を指すが、場合によっては江西省の北部などの周辺地域も含まれる。

新石器時代の最も古い遺跡として、江西省の東北部にある万年県仙人洞、吊桶環などの洞窟や岩陰遺跡が挙げられる。前者から10,000年前後にさかのぼると言われる土器、石器と稲の資料のほか、吊桶環遺跡では大量の獣骨が見つかり、両者の関係も注目されている。

1970年代に発掘した浙江省の河姆渡遺跡は大量の稲粃、稲藁と一部の炭化米、骨耜、平面長方形の高床式住居址（写真3）、セットになる釜と竈や三足器に代表される独自の土器群、木杵の井戸址、空前発達した木工技術、双鳥朝陽文の彫刻品などで広く知られている。この遺跡に見られる高度に発達した水田稲作文化は、当時東アジアにおける稲作起源問題の研究に大きな影響を及ぼした。また、この遺跡では、稲穂や家畜とされる豚の姿が刻まれている土器（写真4）と中国で最も古い漆器（木碗類）が出土し、手工業や家畜業の有無も注目されている。ところが、最近調査した浙江省蕭山県跨湖橋集落遺跡では、同時期の遺構や遺物が出土し、両者の関係がある程度分かったが、

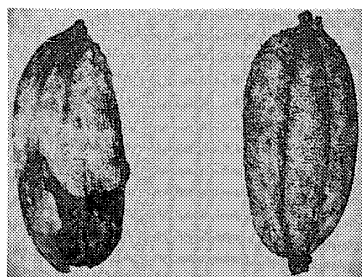


写真5 龍虬荘遺跡の炭化米

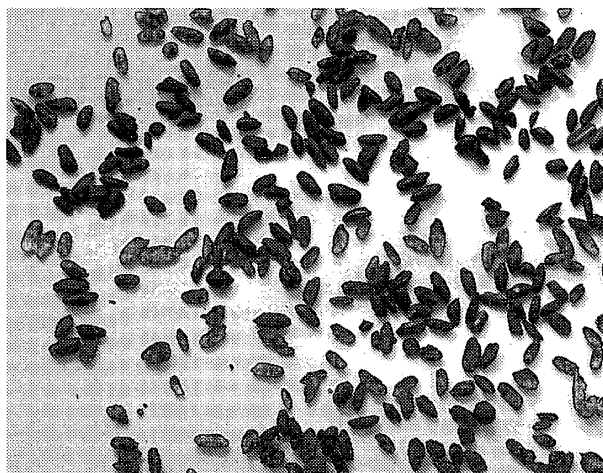


写真6 駱駝墩遺跡の炭化米

後者の土器には長江中流域の大溪文化からの強い影響が見られ、集団規模の移動があったと考える研究者もいる。

河姆渡文化以後、馬家浜文化と崧沢文化を経て良渚文化に至る3,000年以上の間、長江下流域では一貫して水田稲作文化が栄えた。羅家角、草鞋山、龍虬荘⁵⁾などの農耕集落遺跡から炭化米などの実物資料が見つかり、石鍬や石包丁を含む道具類も大量に出土した(写真5)。また、草鞋山遺跡では、水田跡や灌漑施設も検出された。

最近、江蘇省宜興市駱駝墩遺跡の発掘調査によって、初めて太湖以西における馬家浜文化の農耕集落の様子が分かるようになった⁶⁾。

この遺跡は太湖西部の平野と山地の過渡地帯にある小高い丘に立地するが、南北両区に分けられる。北区では、馬家浜文化期の河道が見つかり、それは遺跡を半分囲んでいる現代の河道と繋がる。おそらく環壕の役割を果たしたと推測される。両区では馬家浜文化期の住居址3基、灰坑5基、祭祀遺構4基、大型の貝殻堆積1ヶ所、土坑墓52基のほか、初めて39基の甕棺墓が検出された。

3基の住居址は全部南区、即ち駱駝墩西北部の坂に位置する。第1、2号住居址は東西に繋がっており、そのすぐ南にある第4号住居址と共に一つの居住区をなす。そもそも地形が斜めになっていたため、まず土を3-4層敷いて基底部分を平坦に作り、その上に紅焼土塊を突き固めて床面を作る。柱穴の分布状況によれば、第1号住居址は不定形の長円形で、東西約6.75メートル、南北約6メートル、使用面積は30平方メートル以上あり、出口は南に設けられ、その外には食糧加工用と思われる大口尊が1点置いてある。室内の北半部は壁(基底部分)によって東西2室に分けられる。出口の前にはタニシ殻を砕いて突き固めた地面があるが、室外の活動場所と見られる。第2号住居址も30平方メートル以上あり、前者と大体似ているが、平面は方形である。この住居址は第1号墓(崧沢文化期)によって切られる。また敷き土の中の土器から見て、これらの住居址の相対年代は馬家浜文化後期から崧沢文化への過渡期に当たると考えられる。

北区の包含層は深く埋められ、保存状態が比較的よい。第3-10層は馬家浜文化期に属するが、その中から牛、四不象、ニホンシカ、豚、犬などの哺乳類と亀、鯉、貝を含む魚介類骨や殻が出土した。特に第10層(泥炭層)からは樹木、植物の根茎と土器の破片が出土し、また2,000粒余りの炭化米が検出された(写真6)。

北区の馬家浜文化期の墓地は約10メートルの間隔を持って南北二つに分けられる。南のI区で10

基の浅い土坑墓を発見したが、切り合い関係は2基のみに見られる。その内、被葬者は下向き1基のほか、全部が仰向き伸展葬である。区内には甕棺墓も10基ある。西南部では豚と犬の骨がそれぞれ一体分見つかかり、北のⅡ区からもそれぞれ2体分発見した。Ⅱ区では、馬家浜文化期の墓を42基発見した。被葬者の多くは青年、中年、老年の男女で、下向き5基のほか、全部が仰向き伸展葬である。墓坑の痕跡は明らかではないが、人骨間の重なりや切り合い関係は複雑であり、中には頭や下肢もしくは半身



写真7 良渚遺跡群北部の土壘と堀跡

が欠けている被葬者もあり、一部は追葬によるものである。頭向は基本的に東にやや南へ偏っている。また、区内の第3、4、7層の下から29基の甕棺墓が見つかったが、葬具として多型式の陶釜が用いられた。このほか、Ⅰ、Ⅱ区の間からも一部の甕棺墓を発見した。釜内には赤ん坊の骨が多く、一部の保存状態は非常によいが、その死因については未だよく分からないという。

発掘者の観察によれば、駱駝墩遺跡は前後四段階に分けられる。第1段階の土器は主に黒色（黒衣を施す場合が多い）で、代表的な器形として平底釜が挙げられるが、発掘者は羅家角遺跡の第3、4層と呉家埠遺跡の同型器に影響を与えたと見ている。次の段階には赤色土器が急増する。第3段階にはほぼ全部が赤色土器になり、鼎が初現する。最後の段階には褐色土器が多く増加し、釜の代わりに多様式の三足を持つ鼎が主要器種となり、崧沢文化へ過渡する様子が窺われる。発掘者は羅家角遺跡第4層のC¹⁴年代測定値（BK8004：BC5305—5060年）から第1段階の年代を今から約7,000年前に比定し、太湖以西における馬家浜文化の地方類型の存在を強調している。

一方、最近太湖以東の蘇州市郊外から崧沢文化の環壕集落遺跡の一部が見つかったが、詳しい状況についてはまだ報告されていない。新石器時代の環壕集落遺跡が太湖流域で発見されたのはこれが初めてであるため、その学術的意味は非常に大きいと予想される。

良渚文化において最も重要なのは良渚遺跡群である⁷⁾。とりわけ莫角山遺跡と遺跡群の北部を東西に走る大規模な土壘と堀跡が注目を浴びている。

莫角山遺跡は良渚遺跡群のほぼ真ん中にある、人工で盛り上げた高い土台の上に立地する。土台は東西670、南北450メートル、高さ10メートル以上、総面積は約300,000平方メートルにのぼる。環壕や城壁がないのは、土台の高さだけでも十分防御（外敵と洪水）の役割を果たすことができるからである。この意味から「台城」と呼ぶ研究者もいる。土台の上には高さ4—5メートルの高台があり、ボーリング探査で多くの版築基壇を発見したが、その総面積は30,000平方メートル以上ある。高台の上で大型建物（宮殿址？）の柱穴や干し煉瓦も見つかった。

莫角山遺跡の周りには、匯観山、反山、瑤山などの祭壇址や貴族墓地が分布しており、玉琮、玉璧、玉鉞に代表される数々の玉製礼器が出土した（写真8）。玉琮や玉鉞に刻んだ神人像は大きな羽冠を被り、逆台形に近い顔には厳しい表情が溢れており、肩臂には魚鱗状に近い鎧が見える。両手は玉璧を持ち、両足は猛禽の足を模っているなど、神人一体像に違いない。稲作農耕文化を基盤



写真8 反山遺跡23号墓の夥しい玉器

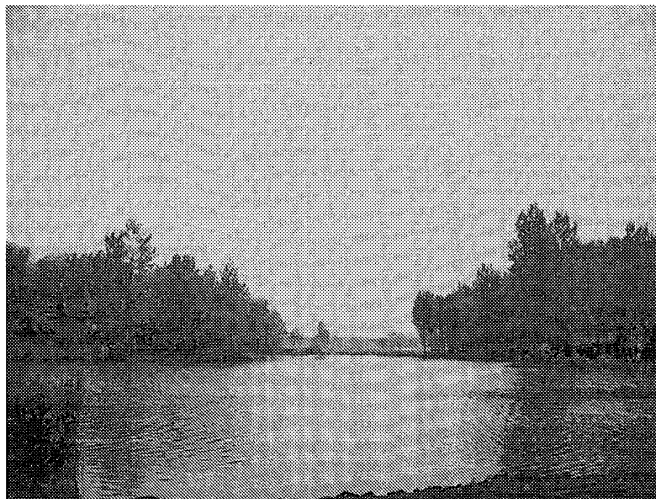


写真9 賈湖遺跡遠景

とする良渚社会では、すでにある程度の神権政治が行われていたと考えられる。良渚遺跡群は良渚文化の中心地であり、莫角山遺跡は良渚社会の最高支配者たちが居住していた「都城」的存在であろう。

近年、良渚遺跡群の北側、即ち西天目山の余脈である大遮山丘陵以南で全長4500メートルにのぼる、東西に走る土塁を確認した。土塁は基底部の幅が約50メートル、頂上部の幅が約30メートル、高さは3-5メートル（南側の水田に比べて）で、人工的に堆築したものである。その西端部に当たる毛圓嶺一帯で幅約20メートルの堀が土塁の外側（現在は水田）に掘削されたことが分かり、またこのあたりから土塁がゆっくりと南折したとの見方もある。現時点で見える限り、この土塁と外側の堀は北の山地から来る大洪水を防ぐために造ったと推定される（写真7）。

このほか、良渚の廟前遺跡や江蘇省呉江県龍南遺跡から集落遺跡の一部が調査されている。特に後者の場合、川を挟んで南北兩岸に住居址を横に並べる平面プランは注目すべきである。

青銅器時代の環壕集落遺跡として、江蘇省常州市の淹城が挙げられる。遺跡の平面は円形を呈しており、土塁と堀は多重になっているため、軍事防衛的性格が濃い。かつて堀の中から青銅器や丸太舟などの遺物が出土し、周代の江南古国遺跡として知られているが、青銅器には地域色に富むものが少なくない。

一方、河南省中南部にある舞陽県賈湖遺跡は淮河水系に属する潔河流域の沖積平野に立地し、東約30キロメートルのところに京広（北京-広州）線鉄道が南北に走っており、東西の交通においても非常に便利である（写真9）。遺跡の平面は不定形の円形を呈しており、総面積は約55,000平方メートルある⁸⁾。遺跡の西部を中心に、45基の住居址が見つかったが、楕円形や方形に近いものもあるが、不定形のものが多く、竪穴式の単室、多室のほか、高床式2基、地上式1基がある。灰坑は370基あるが、大きさがかなり異なり、居住区を中心に分布されている。総数349基の墓は遺跡の西部、中部と東部に集中されており、時期によって墓地の所在が異なるが、平面長方形の竪穴式土坑墓が主流をなす。単人の仰向き伸展葬が多く、無頭葬も一部ある。

石製の斧、鏟、歯刃鎌、骨製の鏃、銛のほかに、鼎、壺、方口盆、鉢、甑、碗などを含む土器の多くはさらに多型式に展開し、よって前後3期に分けられ、主要年代は今から7,800-9,000年前に当たると判断される。勿論周辺地域との広範な交流関係も窺われるが、独特の地域色を有するため、発掘者は既知のものとは異なる独特の地域考古学文化の存在を主張している。

注目されるのは、第174号灰坑を中心に、約600粒の完形の炭化米が出土し、部分的な鑑定によれば、栽培稲に違いなく、長粒型（籼型稲）が多いようである。淮河水系でこんなに古い稲作資料が見つかるのは、この遺跡が初めてであり、稲作の起源や伝播ルートを考える上では非常に重要である（写真10）。

動物骨は主に廃棄した住居址、貯蔵穴、窯跡などで出土するが、数百キログラムにのぼり、猪、鹿、四不象、ウサギなど、20種類以上あり、家畜として（可能性のあるものも含めて）豚、犬、羊、黄牛、水牛などが挙げられる。このほか、鯉、青魚、亀、鼈、タニシなどがあり、野生のグルミ、野菱、野生の大豆のほか、白鳥などもある。また、一部の墓から犬（全体分）、鹿、豚、牛の下顎骨が出土した。

住居址の基礎部や灰坑では、亀や鼈の甲殻が組となって見つかり、中には大きさが異なる小石が入っており、特定の記号（符号）を刻んだものもある（写真11）。前者の場合、奠基の可能性が考えられる。

また、15基の墓から鳥の足骨で作った笛が25本見つかった（写真12）。その内、七孔笛が14本、五孔、六孔、八孔のものがそれぞれ1本、半成品が2本、あとは残欠品である。15人の被葬者の内、成人男性が13人、成人女性が1人、あと1例は人骨の保存状態が非常に悪い。一部に限って、調音孔もある。

一方、安徽省北部にある蒙城県尉遲寺遺跡は淮河に注ぐ北淝河の北約2キロメートル離れたところにある、比高2-3メートルの小高い崗地を中心にして立地し、現存面積は約100,000平方メートルあり、環壕による平面プランは南北に長い楕円形に近い。しかし、土塁の跡は見当たらない。

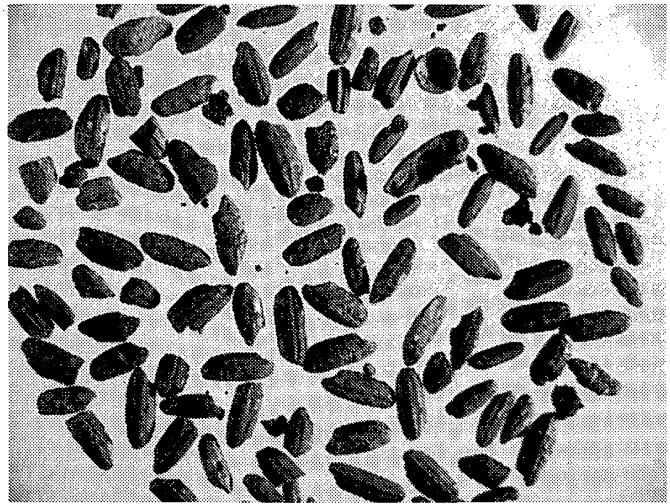


写真10 賈湖遺跡の炭化米

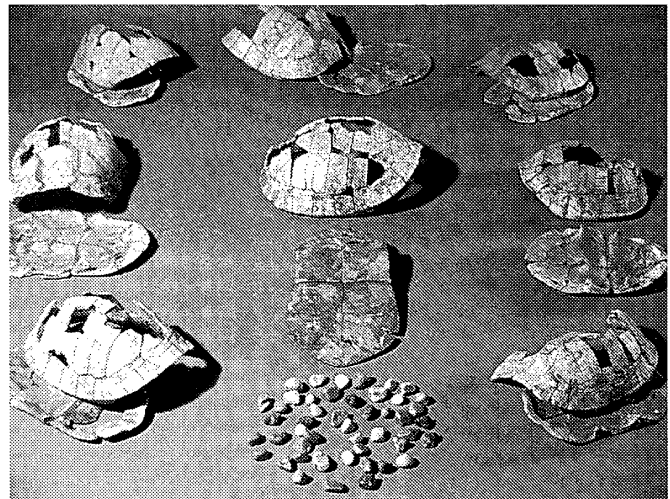


写真11 賈湖遺跡の鼈骨と小石

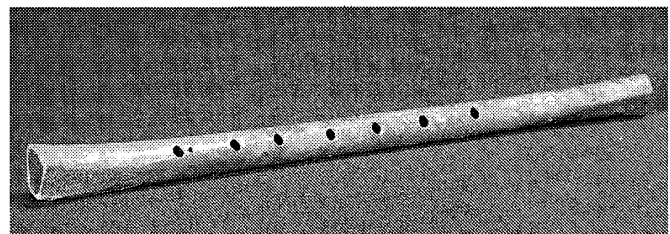


写真12 賈湖遺跡の骨製七孔笛

その内、崗地の現有面積は約50,000平方メートルで、平面は不定形の方形を呈している⁹⁾。1989年の秋から1995年の春まで、前後9次にわたる学術調査で約7,000平方メートルを調査し、環壕に囲まれた集落の中で、大汶口文化後期の紅焼土住居址41基（その内、連棟式12組39間含む）、墓192基、灰坑45基、祭祀坑4基、獣坑7基と大量の土器、石器、骨器、角器、牙器などの道具と装身具が出土し、また龍山文化の墓12基、乱葬坑1基、灰坑66基のほか、一部の土器、石器などが出土した。



写真13 蒙城県尉遲寺遺跡の排房跡

ボーリング探査の結果によれば、環壕は南北の長さが230-240メートル、東西の幅が220メートル、断面はU字形を呈し、幅25-30メートル、深さ4、5メートルを測り、大汶口文化後期の遺構を内包する。しかし、西南部に限って、約20メートルの範囲にわたって環壕の跡が見当たらず、また集落内部の建物の方向とも一致することから、集落全体の出入口だった可能性が大きいと考えられる。土器の比較研究によって、環壕と住居址の使用年代と廃棄年代が大体一致することが分かり、また壕内で確認された八つの包含層の内、第7層に属する土器の破片に対する年代分析から、4,700年前の測定値が得られた。環壕の用途においては、防御的性格のほか、壕内堆積の特徴や集落の中で未だ井戸跡が見つかっていないことから、集落内部の用水、排水（特に雨季における洪水に備える）にも利用されたと考えられる。

住居址は平面長方形の連棟多間式（排房）が中心となり、合計12列39間が検出された（写真13）。方向として西北-東南向きが多く、東北-西南向きもある。建築工法として、まず地勢のやや高いところ、もしくは緩やかな坂地を選び、床面の予定地を掘り下げてから、その周りに沿って細い溝を掘り、木骨土壁を立てるが、紅焼土塊を充填料としてよく使い、外側を泥で塗ってから焼く。床面はまず下に厚さ5-8センチメートルの黄色五花土を敷き、その上に約5センチメートルの紅焼土粒を敷いてから突き固めたため、平坦で堅固であり、地盤の沈下と湿気を防ぐことができる。最後に床面と土壁の内外両面をもう一度細泥で塗り、また火で焼く。ところが、屋内の隔壁には礎を造らない。ドアの多くは西南側の壁に設置するが、幅は60センチメートルで、木製の枠と扉が付いていた。ドアの外の地面も細泥で塗り焼く。土壁に支えられた屋根は切妻式で、垂木として板材に近い部材が利用されており、その間には葦などの植物の茎葉が用いられた。住居の前には戸外活動のための空間があり、第11号住居址の前には300平方メートルに達する広場があり、最大規模を誇る。

敷地の面積は組によって異なり、それぞれ2間、4間、5間、6間一棟があり、87平方メートルに近い最大のものから13平方メートルをわずかに超えるものまで、大きな差が見られる。部屋毎の面積は10-30平方メートルに収まるが、20平方メートルを超えるものは少なく、12-15平方メートルのものが多い。平均1-3間の部屋に一つの小部屋が付いているが、その面積は普通4-5平方メートルしかない。多くの部屋には二つのドアが設けられており、中には方形の台所があり、床面に

はセットとなる日常用土器と少量の生産道具が置いてある。これに対して小部屋はドア一つのみで、中には少量の土器しか見られない。

このほか、大汶口文化後期に属する192基の墓が見つかったが、その内、竪穴式土坑墓が90基（成人墓66基，児童墓24基，いずれも葬具は見当たらない），児童甕棺墓が102基ある。これらの墓は主に遺集落の北部と東部に分布している。人骨の保存状態は様々であるが、既に鑑定された126基の内、男

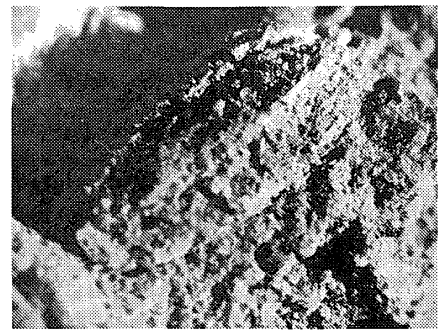


写真14 棲霞県楊家圈遺跡の炭化米痕跡

性墓が36基，女性墓が15基，あとは性別不明である。被葬者の死亡年齢は0-15歳，15-30歳，30-55歳の3組に分けられるが，10歳以下の幼児と18-30歳前後の青年の死亡率が比較的高く，40歳以上の者が少ない。抜歯現象は4例のみで，極めて少ない。

大汶口文化後期の土器は鼎，鬻，罐，甗，尊，盆，壺，高杯，杯，盤，器蓋，甕，缸など，非常に豊富であり，特に太陽，山，炎を象徴する記号が陶尊の外面に刻まれており，典型的な大汶口文化の土器と見ることができる。

石器は鏟，鉞，斧（片刃斧も含む），楔，鑿，包丁，砥石，擦り皿，擦り棒，鏃，璜，装身具など，耕地，収穫，加工のほか，木材の加工具も注目される。

各包含層から取った土のサンプルに対する分析（プラント・オパール）によれば，大汶口文化後期の粟類作物の栽培規模が次の龍山文化時代より大きい，後者の水田稲作規模は前者より大きい。淮河は中国南北気候の分界線であり，よって南北の農業経済も大きく異なる。1980年代の前半，山東省棲霞県楊家圈遺跡で炭化米の痕跡が検出され，龍山文化には既に水田稲作が行われていたことはよく知られているが，大汶口文化後期から既に畑作を中心としながら，水田稲作も営んでいたことは殆ど知られていなかった（写真14）。このほか，尉遲寺遺跡では大汶口文化後期に属する豚，犬，猪，牛，鶏，ウサギ，タニシ，鼈，魚，鳥，あなぐま，虎，四不象などの骨が出ており，龍山文化層からも大体同様のものが出土した。

三. 長江上流域

ここでは主に四川省の成都平野を指す。青銅器時代文化として三星堆遺跡や金沙遺跡などが広く知られており，近年には龍山時代に相当する宝墩文化が確認されたが，さらに古い新石器時代文化についてはよく分からない状況である。

これまで成都平野では，少なくとも6ヶ所の大型集落（城址）が見つかったが，全部宝墩文化に属しており，環壕集落遺跡は殆ど確認されていない。

宝墩古城遺跡	四川省新津県
芒城古城遺跡	同 都江堰市
魚鳧城古城遺跡	同 温江県
郫県古城遺跡	同 郫県
双河古城遺跡	同 崇州市
三星堆古城遺跡	同 広漢市

これらの城址は標高470-650メートル，比高0.3-3メートルの小高い台地の上に立地しており，

周りには河川が比較的多い。環壕の有無はよく分からないが、宝墩古城遺跡の東南隅の外側に今も魚塘があり、環壕の跡を転用した可能性が大きい。

平面形態は主に城壁の走向により確認されたが、全部が長方形もしくは方形に近いものである。城内の面積として、魚鳧城古城遺跡300,000平方メートルで最も大きく、郟県古城遺跡が270,000平方メートル、宝墩古城遺跡が250,000平方メートル、芒城古城遺跡が120,000平方メートルである。

宝墩古城遺跡の土器は3段階に分けられ、城壁は第3段階に属することが分かる一方、ボーリング探査によって、城壁が築かれる前に既にこの古城の面積をはるかに超える大規模な集落遺跡があったことも確認した。C¹⁴年代測定値によれば、この古城の年代は今から4,500-4,000年の間にあり、中原地方の龍山時代に相当する。

上記の古城址とおそらく同系譜にある青銅器時代の城址は三星堆遺跡である。城壁は中の主体部と内外両側の補強部とに分けられる。前者は水平版築法、後者は階段式版築法によるものであり、また前者の頂部では干し煉瓦も見つかり、城壁をさらに高くするための行為と見られる。この城址は東西1,600-2,100メートル、南北2,000メートル、総面積3.5-3.6平方キロメートル、南部より北部が狭い城郭遺跡である。周知の如く、十数年前に城内の南部から2基の大型祭祀坑が見つかり、青銅器を中心とする大量の遺物が出土した。とりわけ大型神樹や大耳、柱形巨目、厳粛な表情をする人面像などに代表される青銅器は独特の地域色を持っている。これらの人面像に類似する玉製小型人面像は先述の石家河遺跡群や湖北省鐘祥県六合遺跡から出土し、長江上流域と中流域の交流関係が注目される。

近年、直轄市として新たに設置された重慶市管下には大溪文化が命名された巫山県大溪遺跡があり、数十年ぶりの再調査で数々の遺構や遺物が出土した。また、それに隣接する湖北省境内の三峡ダム水没予定地からも先史時代の集落遺跡が多く見つかったが、水辺に近いという立地条件に恵まれ、稲作のほか、漁撈業がかなり発達したようであり、一部の遺跡では大量の製塩土器が出土した。ところが、この地域には三峡を含む山地が広がっているため、大型集落遺跡は少ないようである。

以上、長江流域の農耕集落遺跡について考察してきたが、次にいくつかの問題について筆者の考え方を述べておきたい。

1. 上記の農耕集落の源流の問題であるが、先述した高い土塁や深い堀に囲まれた巨大な城郭遺跡と遼寧省牛河梁、山東省西朱封、安徽省凌家灘、浙江省反山、瑤山などの大規模の祭祀遺跡や大型貴族墓が各地域で次々と発見され、従来の黄河文明中心論に対して中国全体を視野に入れて、各地域の古代文明と初期国家の形成過程を探究することが一つの重要な課題となっている。このように農耕文化の発達によって集落が益々拡大化し、環壕集落の段階を経て、城壁と堀からなる二重の防御施設が整った初期段階の城郭が生まれるが、これは基本的に長江流域と黄河流域を中心にして展開されたものであるため、その源流については、中国伝統的な土城史の中で理解すべきである。これに対して中国東北地方の環壕集落は、上記の城郭とは系譜を異にし、環壕を主な防御施設とするものであるため、性格的には日本列島と朝鮮半島のそのものと共通するところが多いばかりか、源流も非常に長く、青銅器時代にも一貫して活用され、年代的にも後者と非常に近いので、東北アジアの中でその源流を理解すべきである¹⁰⁾。

2. 周知のとおり、稲作の起源やその伝播ルートの問題について、これまで学界では様々の形で



写真15 大連市大嘴子遺跡の炭化米

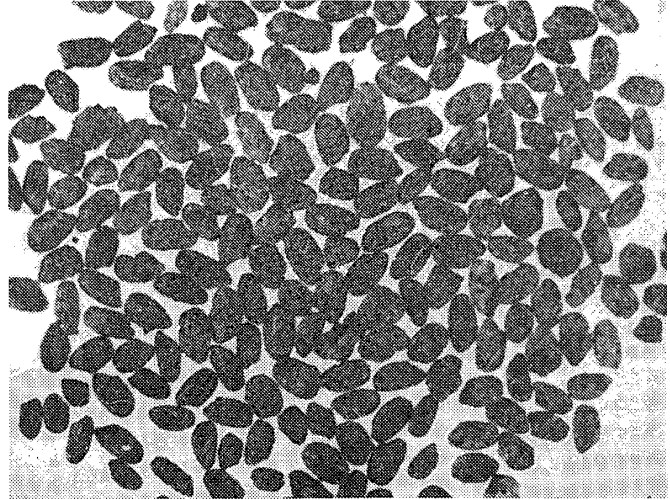


写真16 平壤南京遺跡の炭化米



写真17 扶余郡松菊里遺跡の炭化米

論議されてきた。起源地問題において、従来アッサム——雲南説が有力であったが、前に述べたように、近年長江中流域南部の湖南省澧县城頭山、同彭頭山、同八十垵などの集落遺跡から5,000—8,000年頃前の炭化米や水田跡が検出されるほか、同じ長江水系には属しないものの、湖南省道県玉蟾岩洞窟遺跡からも炭化米が見つかるなど、遅くとも10,000年頃前から既に稲を食糧として利用したほか、人工栽培の可能性も出てきた。また、長江下流域の南部にあたる江西省万年県仙人洞などの洞窟から新石器時代前期の土器が出ており、浙江省の河姆渡遺跡、江蘇省の草鞋山、龍虬莊、駱駝墩遺跡からも新石器時代中後期の炭化米が出

土し、ところによって水田跡と灌漑用の溜め池や井戸跡も検出された。これらの考古発見によって、長江中下流域起源説が最も有力になっている。

稲作の伝播ルートについては、長江中下流域から次第に北上していく中でいくつかのルートに分けられるが、一般的に南路と中路では東部沿海地域から直接海を渡って朝鮮半島や日本列島に、北路では華北と遼東半島などを經由して朝鮮半島や日本列島に伝わったと見られる。山東省棲霞県楊家圈遺跡、大連市文家屯遺跡、同大嘴子遺跡（写真15）、朝鮮民主主義人民共和国の平壤市南京遺跡（写真16）、韓国扶余郡松菊里遺跡（写真17）といった中継点を勘案すれば、基本的に陸地をもとにする北路が最も安全で確実であると考えられる。

1942年に調査した文家屯遺跡A区第3層の紅焼土から、最近の分析によって稲と黍族のプラント・オパールが検出されたと報告されている¹¹⁾。報告書によれば、これは既知の小珠山中層文化に当たり、石包丁が出た第2層は小珠山上層文化に当たる。文家屯貝塚AⅡ区第2層に包含される貝殻のC¹⁴年代測定値は4,550±100 B. P. から4,180±50 B. P. までと、大きな年代差はあるものの、その新しい方は郭家村遺跡上層から出た木炭類のC¹⁴年代測定値と大きな差がないため、小珠山上層文化の年代範囲に入ると考えられる。かつて山東半島の棲霞県楊家圈遺跡から出土した龍山文化

の稲作資料と大連市大嘴子遺跡から出土した双砵子3期文化の炭化米の間には、約1,000年の年代差があるため、稲作の北伝説に不利であったが、これらの資料を見る限り、遼東半島へ伝播するにはあまり長い時間が掛からなかったようである。また、約4,100年前に遼東半島の南端部で稲が栽培されていたということは、朝鮮半島や日本列島における稲作の起源問題に関わる重要な発見であり、粟や黍を含む畑作農耕の伝播問題も考えられるようになってきた。

ところが、遼東半島の文家屯と大嘴子の間には、約1,000年の差がある。この空白については二つの可能性が考えられる。一つはまだ見つかっていないこと、もう一つは稲作の北上に何回かの間歇期のような「空白期」があったことである。ただ稲作は必ずしもいつも遼東半島を経由したとは限らないため、山東半島から海を渡ってまず朝鮮半島中南部の西海岸の平野地帯に上陸した可能性も十分ある。最近、韓国境内で新石器時代にさかのぼる稲の資料が出ており、日本列島でも縄文時代後晩期の関連資料が確認されつつあるが、稲型や年代における差異が比較的大きいため、伝播経路を多様に見るべきである。特に岡山県朝寝鼻遺跡などで検出された、長粒型に属する年代の古い資料の由来に関しては、現時点では龍山時代の山東半島より、さらに南の黄淮流域と長江下流域からの海上ルートを考えてほうが妥当であろう。また、稲作の伝播というのは、単なる稲のみではなく、それが食糧として利用されるに至る生産技術や儀礼を含む物質文化と精神文化の要素が共に伝わったかどうかもあるべきである。そのルートと展開過程の解明にはより総合的な考察が必要であるが、試行錯誤を伴う初期段階の個別的栽培から本格的な稲作農耕への発展には相当長い時間を要したと考えられる。

一方、中国の北方では遅くとも新石器時代の中期から、相当大きな規模で畑作農耕が営まれていた。旱魃や洪水などによってよく生じる不作に備えて、大量の粟や黍を貯蔵する。磁山遺跡は勿論、査海遺跡に見る多くの貯蔵穴もそのために設けたものであろう。山東半島や遼東半島の新石器時代の集落遺跡から稲と共に雑穀資料が見つかり、朝鮮半島と日本列島からも同時代の関連資料が出土するのは、畑作農耕の南下した結果と推定されるが、山東半島と朝鮮半島の間には直接交流があった可能性も否定できない。

注

- 1) 2000年2-3月の調査研究については、『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第3号(2001)を参照されたい。
- 2) 2002年度9月の現地調査は龍谷大学国際社会文化研究所の研究助成金による日中両国の共同調査であり、雲南大学人類学科の尹紹亭教授、南京博物院考古研究所の林留根教授のほか、龍谷大学国際文化学部須藤護教授、同徐光輝がそれぞれ民俗学と考古学調査を行った。
- 3) 湖南省文物考古研究所「湖南省考古工作五十年」『新中国考古五十年』文物出版社編、文物出版社、北京、1999。
- 4) 石家河考古隊(湖北省荊州博物館、湖北省文物考古研究所、北京大学考古学系)『肖家屋脊——天門石家河考古發掘報告之一』(上、下)、文物出版社、北京、1999。
- 5) 龍虬莊遺址考古隊『江淮東部新石器時代遺址發掘報告』科学出版社、北京、1999。
- 6) 南京博物院考古研究所「江蘇省宜興市駱駝墩新石器時代遺址の發掘」『考古』2003年第7期、考古雜誌社、北京。
- 7) 国際良渚学文化中心『良渚学文集：發掘報告和簡報』杭州、2001。
- 8) 河南省文物考古研究所『舞陽賈湖』(上、下)、科学出版社、北京、1999。

- 9) 中国社会科学院考古研究所『蒙城尉遲寺——皖北新石器時代聚落遺存的發掘與研究』科学出版社，北京，2001。
- 10) 徐光輝「中国東北地方の環壕集落について——東北アジアにおける環壕集落の源流と展開——」村上恭通編著『東夷世界の考古学』青木書店，東京，2000。
- 11) 遼東先史遺跡發掘報告書刊行会『文家屯——1942年遼東先史遺跡發掘調査報告書』京都大学人文科学研究所考古学研究室，京都，2002。